

時鳥

ホトトギスは、「時鳥」と書きますが、勿論、これ以外にも「子規」「不如帰」「杜鵑」「山郭公」など、実に沢山の漢字が当てられています。

また、ホトトギスは、多くの歌人によって詠まれていて、百人一首では、後徳大寺左大臣の

「ほととぎす 鳴きつるかたをながむれば ただありあけの 月ぞ残れる」
という歌が残されています。

ホトトギスは、夏の季節になると訪れ、秋深く寒くなると南へと去っていく渡り鳥です。

「ありあけの月」ということですから季節は秋、いよいよホトトギスが南へと去っていく、冷たい風で身が引き締まる感じがします。

そうした雰囲気的一句に、一茶の

「うす墨を 流した空や 時鳥」というのがあります。うす墨を流した空というのは、如何にも寒々しい感じがします。

また、こういう不思議な一句もあります。

「時鳥 不如帰遂に 蜀魂（氷川清話）」

これは、勝海舟が詠んだ一句です。

「時鳥」も「不如帰」も、そして「蜀魂」も、すべて「ほととぎす」のことですが、海舟先生によれば、「人生すべて、かくのごとしさ。」とあります。

要するに、何のことだか分かりませんが、私なりに理解するとすれば、少壮の時は、時流に従って大いに騒ぎ立て、活発に活動もするが、やがて、中年を過ぎたあたりから不平やら不満、失望を抱えながら生きていく。そして、年を重ねて最後は、魂となってあの世に行くばかり、ということでしょうか。

「不如帰」「蜀魂」共に中国の伝説に由来するもので、一説によると、その昔、蜀という国が荒れ果てていた時、杜宇という男が現れ、農耕によって国を

再興し、帝王となって望帝と称します。やがて彼は、帝位を時の宰相に譲り自分は山中に隠棲します。そして、死ぬとその魂はホトトギスに化身し、農耕を始める季節になるとその事を知らせるために鳴くのだということです。また、ホトトギスに化身した杜宇は、蜀が秦に滅ぼされたとき、それを嘆き悲しみ、「不如帰（かえるにしかず）」と鳴いて血を吐いたと伝えられています。

正岡子規が、吐血で苦しむ自分をホトトギスの別名「子規」と号したのも、こうした故事に由来していると思います。

ホトトギスの説明が長くなってしまいました。本題に戻しましょう。

勝海舟は日本の歴史に大きな足跡を残した人ですが、それでも、天下のことは思うに任せなかったようです。だからといって、世を拗ねているのではありません。命がけで戦ってきた故の、達観といった方が良いでしょう。

同じ勝海舟の一句に、

「車引き 車引きつつ 過ぎにけり」というのがあります。この句は、車夫がいずれ何か商売替えをしよう、しようと考えている内に、とうとう何もできずに一生を過ごしてしまう、という意味で、これは、日々何ものかに追われるように生きている、我々に対する警鐘のようにも感じます。（塾頭 吉田 洋一）